



櫻の宮

笑福享 松 鶴

エ、エ、一席御伺ひますは、相變りませず、お古いお噂を申しあげます。春先は人間の氣が變りまして櫻が咲き出しますと、松鶴等は宅の事を忘れて、家も藏も借家もいらん、皆賣て仕舞へと言ふ氣になります、未に無いので依う賣りまへん、況て若いお方は疊に尻がジツト落附いて居まへん、此處は稽古屋の連中が四五人連れで、

「定はん今日は」

「誰方かと思ふたら、松さんに、寅はんに、喜いさん皆お揃ひで何處へ」

「どだい、表を瓢箪を提げて大勢がうろつくので、内にドイツと仕事を仕て居られまへん、我々も一

つ揃ふて櫻の宮へでも出掛けたら如何だす」

「そこで、なんと趣向がおますか」

「毎年の様に赤繻袴の肩脱で、チョイく、コラくと、踊つて行くのも面白無いので、なんぞ宜い思惑がおまへんか」

「貴郎の方になんぞ思惑は」

「私には何も是と言ふて有まへんが、何や喜いさんに宜い思惑が有るそうぞ」

「ア、左様うか、喜いさん貴郎甚い宜い趣向が有るそうだんな」

「イエ別に宜い趣向と言ふ事はおまへんが、なるべく人の目に立つ事が遣つて見たいと思ひまね」

「さようく、ア、甚い事を遣り依つたなアと言ふ様な事を」

「甚い事を遣り依つたなアと言ふて、目立つて、驚く事なら、連中が赤い手拭で頬冠をして、櫻の宮へ行つて枝ぶりの宜い櫻の枝で並んで首を釣つたら、甚い事を遣り依つたと吃驚すると思ひます」

「モシ喜いさん、ウダく言ひなアんなや、花見に行つて首を釣ると言ふ様な、そんな阿呆な事が出来ますか、正眞やと思ふたら、アラ洒落やつたんかと言ふ様な趣向が、何ぞおまへんか」

「それなら、連中が皆、イジカリ股をして歩行まんね、大勢が見て居る前で、シュツと立て歩行たら」

「そら、なんだんね」